「藤樹紙芝居」の紹介⑬

『志を立てる』

（解説）

藤樹先生は、数え年十一歳の時、孔子の学説を弟子たちがまとめた『大学』を始めて知りました。先生は、独学で学び「立派な武士である前に、心の立派な成人になることを志した」と伝えられています。

先生は、近江の小川で、ささやかな農業を営む両親の長男として成長しましたが、数え年九歳の時に、武士であった祖父中江吉長の養子となり、両親の元を離れ米子に行きました。この地で始めて文字を習った先生は、すぐに上達し、文字に拙い祖父に代わって手紙を書いたと伝えられています。

その後間もなく、一年余りで、藩主加藤貞泰の移封に伴って、四国の大洲に行きましたが、祖父吉長が、飛び領地、風早の郡宰になったことから、その地に移り住みました。大洲藩六万石の内八千石も占める風早の地を、わずか百五十石の知行であり、すでに七十歳になっていた吉長が任された

のですから、高い信頼を受けた人物であったのだろうと思われます。学問を身につけさせたいという祖父の思いによって、先生はその風早で『大学』に出会うことができたのです。

儒教は、応神天皇（四世紀）の世に、百済から「論語」「千字文」が伝わり、朝廷で用いられてきました。その後は公家の家業となり、鎌倉時代に伝えられた中国宋代の新儒教（朱子学）も主として、禅寺院において禅僧の教養として止まったままで、世に広まるようになったのは、江戸時代になってからでした。

藤樹先生が風早で『大学』に触れ、学んだ経緯について伝えるものはありませんが、大洲城下から離れた風早において、儒教に明るい人物がいたとすれば、禅僧以外になかったと思われます。郡奉行所があったとされる場所近くに、今も「一心庵」という禅寺がありますので、そこで手ほどきを受けたのだろうと思われます。先生の学業は、この風早の地で始まりました。

今日もたくさんの人々が、先生の学徳を慕い、深い感化を受けています。拙い紙芝居ですが、風早の地における先生のひたむきな立志の心が、今の子ども達の大きな夢や希望に繋がることを願って作成しました。

（紙芝居）

① 与右衛門さんは、九歳の時、おじいさんに連れられ、近江の小川村から米子に移り住みました。この米子で一年近く暮らした十歳のころ、殿様のお国替え

（治める領地が替わること）で、四国の大洲へ行くことになりました。殿様に仕える家来たちは、みんなお城に集まり、家老からくわしい話を聞きました。

家老「皆の者、このたびお殿様は、米子から大洲へとお国替えになられた。本日より五日あとに、出立いたす。しっかりと準備するよう申し伝える。皆の者よいな。」

家来達「ははあ、分かりました。」

家来たちは、急な命令でしたので驚きました。お城から帰る道々で、小声で話をしました。

家来一「たった五日で、引っ越しの準備ができるものでござるか。」

家来二「闘いで明け暮れた頃は、命令が出ればその日のうちに出発したものだ。五日もあれば心配はないさ。」

家来一「そうだ。そう思えば少し気が楽になった。皆でがんばって準備するぞ。」

家来二「我々家来は、お城の大切なものを運び出す準備があるから、家のことは、家族にまかせようと思う。大変だががんばろう。」

② この命令は、与右衛門さんの家にも伝えられました。おじいさんの吉長は、お城の国替えの準備で家に帰れなかったので、おばあさんの指図で、与右衛門さんは、中江家の家来や近所のお手伝いのおじさんと力を合わせ、大急ぎで準備を始めました。

おばあさん「与右衛門、家具や台所の道具は、私が片付けますから、あなたたちは持っていく大切な物だけをまとめて、荷造りをしておくれ。」

与右衛門「はい、おばあさん、分かりました。何でも言いつけてください。」

準備は思ったより早くできました。

おばあさん「おじいさんがお城から帰れないので、助かりましたよ。」

与右衛門「おばあさんやおじさんたちが、いろいろと教えてくださったから何とか準備ができました。ありがとうございました。」

おじさん「私たちも、こんなに早くできると思いませんでした。奥様と与右衛門様が、よく働いてくださったおかげです。おなごりおしいですが、どうぞ、お体に気をつけて、長旅をしてくださいね。」

おばあさん「お世話になりありがとう。お別れするのがさびしいですが、どうぞお元気でね。」

おじさん「だんなさまにも、よろしくお

伝えください。」

おばあさん「分かりました。ありがとう。皆さんもおたっしゃでね。」

③ いよいよ、大洲への旅立ちの朝になりました。

おじいさん「わしは殿のお供をして、一足先に出立するぞ。お前たちといっしょに行くことはできぬ。四国に行くには、険しい山道を歩き、船にゆられて海を渡らねばならぬ。与右衛門よ、旅の道中、おばあさんを頼むぞ。」

与右衛門「はい、わかりました。ご安心ください。おばあさんをしっかりと、お守りいたします。」

おじいさん「与右衛門の頼もしい言葉を聞いて安心した。任せたぞ。」

おばあさん「おじいさんも、お気をつけて行ってください。」

おじいさんは、与右衛門さんの頭をなで、大急ぎで城に向かいました。

おばあさん「大洲までは、気が遠くなるような長旅だけど、与右衛門の足手まといにならないようにがんばって歩きますよ。大切な薬やこうやくは、私が持ちましたから、老人の私も大丈夫ですよ。」

家族の者達は、殿様の一行を見

送ってから、米子を出発しました。よちよち歩きの小さい子や、生まれたばかりの赤ちゃんを抱いたお母さんもいます。年老いた人もいますから、ゆっくりと歩かなくてはなりません。与右衛門さんは十歳でしたが、泣き出す小さい子をあやしたり、お年寄りの手を取っていっしょに歩いて、励ましたりしました。

④ 米子を出発してから数日歩くと、いよいよ険しい山道の旅になりました。どの家族も励まし合ってしんぼう強く歩きました。米子を出発してから一か月近くが過ぎた時のことです。長い峠を越え、下りはじめると、目の前に青々とした広い海が現れました。子ども達も大人達も、ほっとして笑顔になりました。

佐之助「わあい、海だ。与右衛門ちゃん、あの海は何という海なの？」

与右衛門「瀬戸の海だよ。きれいな海だなあ。」

佐之助「すると、海の向こうに見える山は大洲かな？」

お花「大洲だと思う。お母さんが、『山を越えたら、大洲が見える』と言ってたよ。」

峠の坂を下りて、尾道の港に着きました。今度は待ちに待った船に乗って、四国に向かって瀬戸の海を渡ることになりました。海風は、みんなの体や髪の毛をなでるように、涼しく流れていきました。ようやく、伊予長浜の港（愛媛県）に着きました。

お花「与右衛門ちゃん、知っているかな。今夜は、伊予長浜の宿屋さんに泊まるらしいよ。」

与右衛門「布団で寝るのは、久しぶりだな。でも、星空を見ながら眠るのも楽しかったね。」

どのような苦労も、過ぎてしまえば楽しい思い出になるものです。その夜は、宇和島の宿屋に泊まりました。久しぶりに、やわらかい布団で、ぐっすりと眠りました。

⑤ 翌朝、大洲城から宿屋まできてくれた出迎えの武士に案内されて、肱川に沿うように造られている山道を登って、大洲に向かいました。大きな山を越えると、先に大洲に着いていたおじいさん達が、家族みんなを迎えてくれました。

与右衛門「おじいさん、おばあさんをしっかりとお守りできました。」

おじいさん「与右衛門よ、ありがとう。よくがんばってくれたのう。」

そう言って、おじいさんは与右衛門を抱きしめました。

与右衛門「おじいさん、あれが大洲の城下町ですか。」

おじいさん「おう、そうじゃ。すばらしい眺めだろう。肱川はあゆも泳いでいるぞ。与右衛門、大洲は良い所じゃ。」

与右衛門「あゆが泳いでいるのですか。わあ、うれしいな。小川村みたいだ。」

大洲の町は、美しい緑の山々に囲まれた盆地を中心に、米や野菜が豊かに育つ土地でした。盆地の真ん中を、ゆったりと流れる肱川が見えました。

おばあさん「与右衛門、ここはとても暮らしやすい所だそうですよ。冬でも暖かい日が多いと聞いています。この大洲で、しっかりと勉強に励みなさいね。」

与右衛門「はい、文字を覚え、学問に励みたいです。」

与右衛門さんの言葉を聞いて、おじいさんとおばあさんは、目を細めてうなずきました。

⑥ 与右衛門さんは、大洲に着いて間もなく、近くのお寺で文字の手習いを始めました。ひらがなはすぐに覚え、漢字も覚えて簡単な文が書けるようになりました。

ところが、数か月するとまた引っ越しすることになりました。おじいさんは大洲藩の飛び地（藩から離れた土地）である風早郡を治めるお奉行になったからです。おじいさんは、与右衛門さんを呼びました。風早に着いて間もなくのことです。

おじいさん「与右衛門や来なされ。これを見てごらん。」